

消化器内科

主任部長 榮枝 弘司

2020年の内視鏡検査および処置総数は、【表1】のように上部消化管内視鏡3439例（うち超音波内視鏡199例）、小腸内視鏡13例、大腸内視鏡1958例、逆行性膵胆管造影(ERCP)584例で、そのうち緊急内視鏡は上部消化管249例、下部消化管117例、ERCP168例です。内視鏡治療の内訳として吐・下血に対する内視鏡的止血術は上部232例、下部37例で、胃食道静脈瘤に対する内視鏡的治療数は、硬化療法9例、結紮術52例です。内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)は、食道癌12例、胃癌41例、大腸癌10例で、胃十二指腸内視鏡的粘膜切除術(EMR)は19例、大腸粘膜切除術は245例施行しています。

2020年は予想外のコロナ禍となり、4月下旬からは内視鏡時のガウンが全国的に不足し、当科でも医師と検査技師がゴミ袋からガウンを手作りしていました。その後は社会福祉法人ファミリー高知で作成していただき、現在も使用しています。

また感染予防のため消化器内視鏡学会の提言に基づき、4～5月および12月にかけては検診や経年的な内視鏡は控えていました。しかし上部消化管の通常内視鏡数は前年度とほぼ同数で、下部内視鏡やERCP数はやや増加しており、内視鏡処置症例数の減少もありませんでした。ERCPおよびEUSは、4月に大川良洋医師が順天堂大学から帰任後増加してきており、2021年以降も膵腫瘍の早期発見のため積極的にEUS症例を増やしていく予定です。また大腸内視鏡は、前処置のためのトイレ付専用個室が7部屋しかないことから、在宅で前処置をしてから来院する在宅CSを勧めようになり、患者さんが徐々に増加してきています。今後も在宅CSを積極的に勧め、大腸癌の早期発見・治療につなげたいと思います。

これまでの消化管内視鏡検査総数の年次推移を、図1～図4に示します

表1 内視鏡件数

総数	6137	内訳	
気管支鏡	134		
上部消化管内視鏡	3439	通常検査	2637
		止血術	137
		拡大内視鏡（精査）	109
		食道ESD	12
		胃ESD	41
		十二指腸ESD	0
		胃十二指腸EMR	19
		静脈瘤硬化療法	9
		静脈瘤結紮術	52
		食道・胃APC	46
		異物除去	32
		胃瘻造設	36
		超音波内視鏡	199
		FNA・Drainage	20
嚥下内視鏡	24		
小腸内視鏡	13	通常検査	12

		処置	1
--	--	----	---

カプセル内視鏡	33	通常検査	20		
		パテンシーカプセル	13		
大腸内視鏡	1958	通常検査	1547		
		止血術	72		
		大腸 ESD	10		
		大腸 EMR	245		
		その他	84		
透視下内視鏡	754	ERCP	584		
		消化管拡張	13	食道	10
				胃十二指腸	0
				大腸	3
		ステント挿入	20	食道	2
				胃十二指腸	3
				大腸	15
透視下 CS	66	イレウス管	3		
		その他	63		
		その他	71		

	総数	内訳	
緊急内視鏡	517	上部消化管	232
		下部消化管	117
		ERCP	168

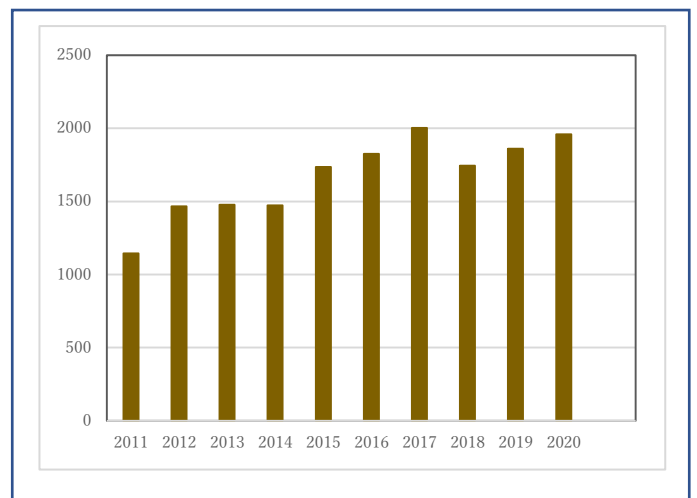
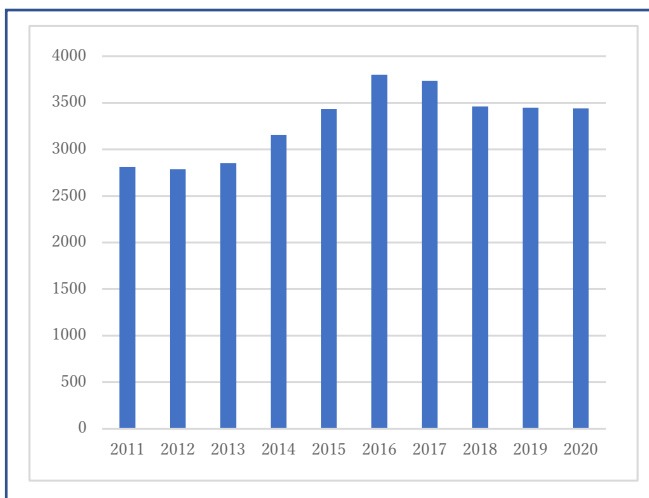


図1 上部消化管内視鏡数の推移

図2 下部消化管内視鏡数の推移

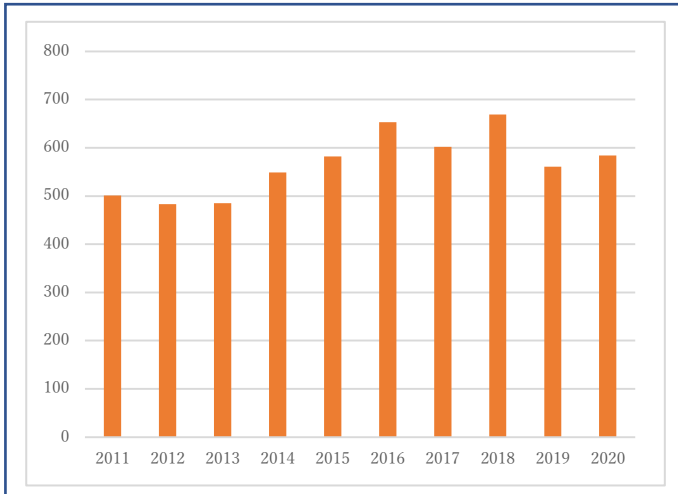


図3 逆行性膵胆管造影数の推移

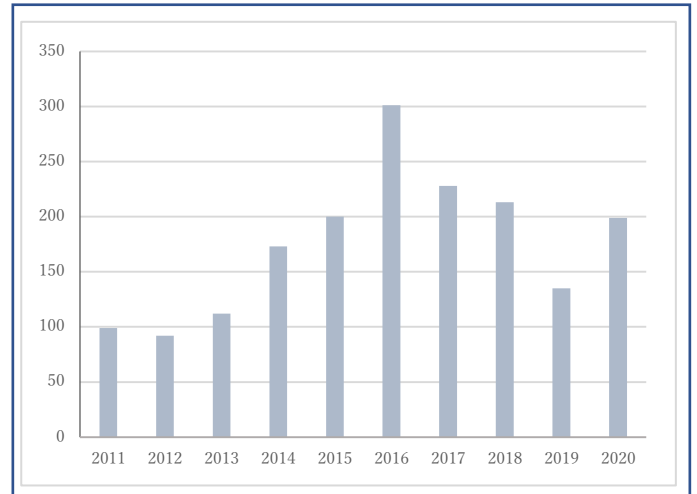


図4 超音波内視鏡数の推移

C型ウイルス性肝炎・肝硬変に関しては、2015年以降経口抗ウイルス剤を260人以上投与していますが、1人を除いて全てウイルスを排除できています。2015年以前ののインターフェロン治療例を含めると700人以上の患者さんでウイルスが排除できています。そのため新規の肝細胞癌の出現が減少し、経皮的ラジオ波焼灼法の症例数も4年前から減少してきており、2020年はRFAを開始した2000年以降では最も少なくなりました。(表2)

表2 経皮的肝細胞癌治療および肝生検数

経皮的肝細胞癌治療	33	
		ラジオ波焼灼療法 29
		エタノール注入療法 4

経皮的肝生検	19	
		経皮的肝生検 17
		経皮的腫瘍生検 2

2020年4月からの消化器内科の人事は、高松正宏部長が3月末で退職して開業（クリニック土佐久礼）され、4月から矢野慶太郎医師が内視鏡治療の国内研修のため自治医大消化器内科へ赴任し、2021年6月末に帰任予定です。また12月から田島萌夢医師が、北里大学北里研究所病院の炎症性腸疾患先進センターへ赴任し、炎症性腸疾患の第一人者である日比紀史先生の下で研修をしています。帰任後はIBD患者さんの診療に頑張ってくれると思います。順天堂大学胆膵内科で膵胆道疾患に対する内視鏡治療を研修していた大川良洋医師が4月から帰任し、超音波内視鏡やERCPなどの検査・治療において中心的に頑張ってくれています。

また当院で初期研修医を終えた吉田梨奈医師が4月から専修医として入職しており、消化器内科医として、日々研鑽されています。

10月からは高知医療センター消化器内科の平川雅海医師が、半年間の予定で研修に来られましたが、我々にとっても貴重な戦力になっており、他院の先生方との交流はお互いにとって非常に有意義であると改めて感じています。

2021年3月の時点で、当科のスタッフは後期研修医3名を含めて16名（国内研修中2名、育休中2名を含め）で、医師の働き方改革が求められている今、男女を問わずワークライフバランス

がとれるような環境だけでなく、キャリアアップが出来る環境づくりも重要です。

学会専門医としては、日本消化器病学会の指導医 3 名、専門医 10 名、日本消化器内視鏡学会指導医 1 名、専門医 9 名と肝臓学会専門医 1 名となっています。非常勤の富田秀春医師には腫瘍内科専門医として、化学療法患者さんの外来診療や治療内容について教示していただき、大いに助けられています。

2020 年は新型コロナ感染症の影響により、ほとんどの学会や研究会が中止され、一部は Web による学会となりました。また県外での学会出席も原則禁止されたため、発表予定だった演題もほとんど取り下げざるをえず、最も学会発表が少ない年となりました。また高知大学や東京女子医大、群馬大などからの学生実習も中止になり、勉強や教育という意味でも大きな影響を受けました。2021 年 3 月からはコロナのワクチン接種が始まる予定で有り、今年中には安心して診療や学会発表ができる環境になることを願っています。

学術発表・講演会等

学会発表（紙上発表を除く）

演 題	発表者 共同演者	学会名	開催日時
Superficially serrated adenoma —新たに提唱された疾患概念を含む鋸 歯状病変の検討	田村恵理 田村智	第 124 回日本消化器内 視鏡病学会四国地方会	6 月 20 日 徳島
NSAIDs 経皮製剤（湿布）が原因と考え られた出血性多発小腸潰瘍の 1 例	馬場咲歩 梅下仁 田島萌夢 北岡真由子 岡田光生 榮枝弘司	第 123 回内科学会四国 地方会 研修医奨励賞	6 月 29 日 高松（Web）
急性発症自己免疫性肝炎の臨床病理学 的検討	筒井朱美 柴田啓志 榮枝弘司	第 56 回日本肝臓学会総 会	8 月 21 日 大阪（Web）
直腸静脈瘤出血に対して経皮経肝静脈 瘤塞栓術（PTO）および内視鏡的硬化 療法を併用した症例	榮枝弘司 岡田光生 市川博源 北岡真由子 青野礼 清水和人 宮崎延裕	第 27 回日本門脈圧亢進 症学会	9 月 11 日 大 阪（Web）
門脈腫瘍塞栓を伴う浸潤型肝細胞癌に 対して Vitamin K2 が著効していたが 11 年後に再発し手術を施行した 1 例	榮枝弘司、北岡真由子、梅下仁、 市川博源 岡田光生、青野礼、 津田晋 塚田暁 円山英昭	第 56 回日本肝癌研究会	12 月 22 日 大阪（Web）

高知県内研究会

演 題	発表者 共同演者	研究会名	開催日時
当科でレンパチニブを投与した StageIV 症例	榮枝弘司	第 224 回高知肝疾患症 例検討会	1 月 21 日
大腸病変の 1 例	田村恵理	四国内視鏡カンファレ ンス	12 月 9 日